

## 平成25年度修士論文・卒業論文概要

門, 悟

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

鄭, 春紅

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

朴, 玲河

九州大学大学院人間環境学府 : 修士課程

安達, 陵人

九州大学教育学部 : 学部生

他

<https://doi.org/10.15017/1498395>

---

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 17, pp.119-146, 2015-03. The Laboratory of Educational Administration, Educational Law Graduate School of Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 児童生徒との関係性における教師の役割葛藤に関する一考察

大賀 彩野

(平成 26 年 3 月卒業)

## 【章構成】

- 序章 本研究の目的と方法
  - 第 1 節 本研究の目的と問題意識
  - 第 2 節 本研究の方法と論文構成
  - 第 3 節 用語の定義
- 第 1 章 教師の役割の特性と役割葛藤
  - 第 1 節 教師への役割期待
  - 第 2 節 教職の構造的特質
  - 第 3 節 社会的アンビバランスと教師の葛藤
- 第 2 章 葛藤対処における教師文化
  - 第 1 節 教師の行動様式の文化的側面
  - 第 2 節 アイデンティティへの注目
  - 第 3 節 戦略としての教師文化
- 第 3 章 校則指導から読み解く教師文化
  - 第 1 節 校則指導場面への注目
  - 第 2 節 校則指導における教師文化
  - 第 3 節 校則の「文化化」
- 終章 本研究の成果と課題
  - 第 1 節 本研究の成果
  - 第 2 節 本研究の課題

## 【概要】

### 序章 本研究の目的と方法

「教師は世間知らず」、「教師は理不尽」など、児童生徒に対する教師の態度のあり方を批判する声は大きい。しかし、これは教師のパーソナリティのみに起因しているのではなく、実は、その背景にある教職の構造特性こそが大きな要因となっているのではないかと。例えば、教師はその職務の特性上、「教育目標の達成に向けての指導」と「児童生徒の個性や自主性の尊重」といった、複数のアンビバレントな規範的期待を課せられている。これらの相矛盾する教師の役割の衝突が葛藤を生み、アイデンティティが揺らがされることが、教師と児童生徒の関係性をゆがめる一因となっているのではないだろうか。

このような、教職の構造特性に由来する教師に特有な思考体系や行動様式を、文化的視点から捉えようとしたものに「教師文化」概念がある。そこで本研究では、この「教師文化」概念を援用し、教師の役割葛藤対処における特徴を浮き彫りにし、それら特徴と、児童生徒との関係構築との関連を明らかにする。

### 第 1 章 教師の役割の特性と役割葛藤

本章では、教師に期待されている様々な役割とその特性を整理し、それらは対立や矛盾を含んでいることを述べた。研究方法として、教職に関する政策文書や、教師の役割葛藤に関する実践記録・調査データ等を参照した。

教師の役割の特性として、(1)全人的・網羅的な性質をもち、非常に広範多岐に渡ること、(2)社会問題の予防・対処という期待を反映し、役割は肥大化の一途を辿っていること、(3)教職の職業的特質(不確実性、再帰性、無限定性など)が教師としてのアイデンティティをゆらがせていること、の 3 点を指摘した。

さらに、社会的アンビバランス理論を分析枠組みとして用い、教師が抱く役割葛藤の様相は、複数の規範的期待によるアンビバランス(両価性)をはらんだ状態であり、役割群間の葛藤(組織の成員⇔教育者)と役割群内の葛藤(積極的指導⇔自主性尊重)に分類されることを示した。

### 第 2 章 葛藤対処における教師文化

本章では、葛藤対処時の教師の行動や選択行為は「教師文化」により文化的に規定されていることを仮説的に示した。研究方法として、教師文化に関する先行研究を用い、教師文化概念の再検討を行った。まず、既存の教師文化概念を整理し、行動の根拠を個人(教師)あるいは構造の一方に還元するのではなく、構造と個人を媒介する機能へ着目した点に研究上の有用性があると述べた。

本研究ではさらに、葛藤対処時における教師文化のはたらきに注目する意味で、教師のアイデンティティの形成・変容を軸に教師文化の再定義を行った。これは、複数の規範的期待を自身のアイデンティティとして内面化する機能(図の共通領域)を描いたものである。教師個人の信条や価値観(I:主我)と規範(T, O)が相容れないとき、葛藤が生じ、その対処として戦略(支配、友好、役割演技など)が行使される。その結果、規範的期待は教師の主體的な選択のもとで個人的に内面化され「文化」となる(Me:客我)。さらに、それらは教師集団内の相互作用によって共有・蓄積・継承され、抽象的・支配的なものとして「文化化」し、教師のアイデンティティを規定し返す。つまり、教師文化には①「教師としての私(Me)」としての教師文化、②戦略としての教師文化、③「文化化」の結果としての抽象的・支配的な教師文化という 3 つの機能があり、教師文化は教師同士の相互作用を通して段階的にその様相を変えながらその支配性を強めていく「文化化」の円環構造を呈する、という分析枠組みを構築した。

### 第 3 章 校則指導から読み解く教師文化

本章では、指導内容を他律的に規定されることから、教師の葛藤が多く生ずると考えられるとして校則指導場面を設定し、児童生徒との関係性における葛藤対処と教師文化の機能を実証的に捉えることを試みた。研究方法として、校則に関す

〈教師個人のアイデンティティをめぐる教師文化の概念図〉

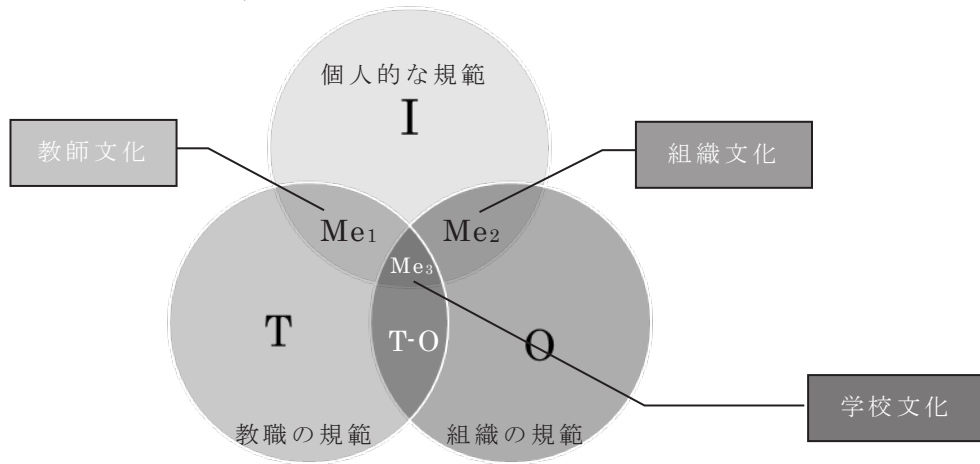


図 1

る先行研究や、校則に対する教師の意識調査を用いた。

校則指導は、無限定性などの教職の特質を反映しており、教師は、自身をとりまく構造特性に多少なりとも影響を受けていることが示された。さらに、教師は校則に対する意識と行動の間に多くの矛盾を抱えており、葛藤を抱えていることが判明した。その対処戦略において教師は、教師としてのアイデンティティの均衡と安定を図ることを最優先課題としていることが示された(例えば、教師は校則の本質や児童生徒の自主性の尊重を希求しているものの、教師としてのアイデンティティを均衡化させるため、画一的で徹底的な校則指導を選択せざるを得ない状況にある)。さらに、この矛盾した行動により、教師と児童生徒との関係に亀裂が生じていることがデータから導き出された。つまり、校則指導とは教師にとってのアイデンティティ均衡化・安定化戦略としての機能を果たしており、それが児童生徒との信頼関係構築を阻害する要因となっていると考えうるのである。

さらに、「教師文化」を軸に先行研究のデータの分析を行ったところ、教職経験を経るなかで、イラショナル・ビリーフの生起(規範的期待の積極的受容)や、困難をかわし、こなそうとするスタンスの選択(規範的期待の消極的受容)といったアイデンティティの変容が起こることが示唆された。

本研究の結論として、以下のことが導き出された。教師は教職上の構造的な特性から、児童生徒との関係性においてアイデンティティの問題を抱えており、その対処のために教師文化を生成・活用する。しかし、その教師文化は相互作用の中で支配性を強め、逆に教師のアイデンティティを背後から規定し、児童生徒との関係構築をさらに困難にさせるといった螺旋構造を呈していると考えられる。

## 終章 本研究の成果と課題

本研究の成果は以下の2点である。まずは、明確な定義がなされていない「教師文化」概念を、教師のアイデンティティ問題という視点から整理・再定義した点である。この問題は教師にとって緊要の課題であるにも関わらず、潜在的で把握が困難であるが、本研究における「教師文化」の分析枠組みを通して浮き彫りにできるものと考ええる。次に、教師のアイデンティティ問題が螺旋構造を呈していることを明らかにした点である。教師文化とは、教師自身の内面化や教師集団における相互作用によって、その抽象性と支配性を重層的に強化し、行為主体である教師自身を規定し返す機能があることを新たに付け加えた。

無論、課題も山積している。それは、本研究で構築した分析枠組みの信頼性と現実性の不足である。本研究では構築した分析枠組みを用いた実証的研究を行うことができず、その信頼性について疑問が残る。また、「教師文化」、「組織文化」、「学校文化」の共通領域を考慮した教師のアイデンティティの様相にまでは踏み込むことができなかった。今後は、より多角的な視点からこの分析枠組みを洗練させることが課題となろう。

### 【主要参考文献】

- ・安藤知子『教師の葛藤対処様式に関する研究』多賀出版、2005年。
- ・久富善之『日本の教員文化—その社会学的研究』多賀出版、1994年。
- ・久富善之『教員文化の社会学的研究』多賀出版、1988年。久富善之『教員文化の日本的特性』多賀出版、2003年。
- ・坂本秀夫『「校則」の研究』三一書房、1989年。
- ・秦政春「学校社会の規範状況に関する調査研究-2-体罰・校則に対する教師の意識を中心に」福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編第37巻、pp. 9-66、1988年。